

教育心理学のルーツとしてのメンタル・フィロソフィー

法政大学社会学部兼任講師 安齊 順子

はじめに

筆者はこれまで日本の教育心理学のルーツとしての西周、元良勇次郎に注目してきた。インターネットの発達により当時訳されていた英語の原本がみられるようになり、今回はその紹介と当時の心理学について考察する。

1. 西周の『心理学』について

今回インターネット上で見つかった『心理学』⁽¹⁾の原著のイントロダクションから教行を和訳してみた。今回利用した本は「Mental Philosophy by Joseph Haven」⁽²⁾出版は1882年、出版社はSheldon and Company、保管はハーバード大学、元の言語は英語である。

太田によれば(1997)⁽³⁾、西の訳した『心理学』の序文に初版は1857年であるが、西が翻訳したのは1869年版であるという注釈がある。

試訳「イントロダクション、チャプター1、精神科学の性質と重要性について。精神哲学、それは何、精神哲学とは何か、科学の他の分野と区別される部分とは何か。哲学は、通常与えられる広い意味で、物事の原因の調査と拡大を意味している。それは、心理的主体とマインドの両方の一般的な法則を科学的に述べることを目指している。その目的は事実とお互いの関係を確認することである。

(精神哲学は事実と、精神活動の法則を確認することを目的としている)」

(INTRODUCTION .Chapter 1

On the Nature and importance of mental science.Mental Philosophy,what,-What is mental Philosophy, as distinguished from other branches of science?Philosophy,in the wide sence usually given it,denoten the investigation and expianstion of the causes of things;it seeks to discover,and scientifically to state,the general laws both of master and mind:its object is to ascertain facts,and their reiation to each other.

(Mental Philosophy has for its object to ascertain the facts and laws of mental operation))

本文の最初には以上のことが書かれていた。このよ

うな流れで西周の訳した『心理学』は精神哲学、その性質、科学的にマインドを記述する方法について述べている。西周が翻訳を行った頃の心理学はヴントの新心理学が発展する前の段階であり、メンタル・フィロソフィーという用語と、サイコロジーあるいはプネウマトロジーなどが混在して用いられていた。文章は以下のように続いている。

(Metaphysics, what.-Of the two grand departments of human knowledge-the science of matter and the science of mind-the former, comprising whatever relates to material phenomena,

the science of nature, is known under the eneral name of Physics, the latter, the science of mind, often designated by the corresponding term, neither very correct nor very fortunate, Metaphysics.)

試訳「形而上学、これは何。-人間の知識の2つの壮大な部門のうち-物質の科学と心の科学-前者は物質的な現象に関連するものは何でも含み、自然の科学、一般的には物理学の名前で知られています、後者は、心の科学、多くの場合、対応する用語で指定されますが、心の科学と形而上学は定義は正確には同じではありません」

形而上学はアリストテレスがその学問上で重視し、『形而上学』という翻訳書もある。アリストテレスの世界では物理学の世界以外の世界のこと、つまり見えない世界や心の世界について論じているものであった。西周は『心理学』を訳す際に造語をたくさん行っており、当時の日本に紹介されていない哲学用語も作ったとされる。まず哲学の本がありそれが訳され、その後心理学が訳されたのではなく、スコットランド啓蒙思想時代の哲学と心理学が混在する時代の本を西周が訳したので、哲学の父でもあり、心理学の最初の訳者となった、と考えられる。

アリストテレスはプラトンのいた学園に在籍し、弟子として哲学を学び、その後リュケイオンという学校を建てたが、母の郷里で亡くなった(伊藤、2012)⁽⁴⁾。様々な著作を書いたが、『形而上学』は哲学的な主著と言われる。日本では『靈魂論』(アリストテレス全集第6巻、1966、岩波書店)(ほかの訳は「心とはなにか」「魂について」と訳されてきた心に関する著作もあり、その著作は心理学のルーツとされている。

『通史日本の心理学』では西周の翻訳『心理学』の目

次が載せられているが、例えば「第一篇 心理学ノ旨趣 并ニ其切要ナルヲ論ス」となっており、理解するには漢文や明治時代の文章を読み解く能力が必要である。現代の若者にとっては、かえって英文や英単語を示した方が理解しやすい面もあるかもしれない。

2. Mental Philosophy について

城戸幡太郎の「心理学問題史」⁽⁶⁾に文献として紹介されていた「A History of Psychology (George Sidney Brett) 1921」⁽⁶⁾のp256以降の記述では、ホップス、ロックなどが紹介されている。同じタイトルで1921年に刊行されたVol.Ⅲ、Modern Psychology⁽⁷⁾の記述により、当時のスコットランド啓蒙思想について紹介する。この本では、Francis Hutcheson (1694-1746) について大きく取り上げているが、彼は哲学者、フランシス・ハチソンとして日本に紹介されており、『美と徳の観念の起源』『道徳哲学序説』などの翻訳がなされている。デイヴィッド・ヒュームに影響を与えた人、またスコットランド常識学派 (Scottish School of Common Sense) としても知られている。

この学派は我々の認識の基礎を「常識」においており、トマス・リードなどを代表とする哲学の学派である。アバディーン大学、グラスゴー大学、エディンバラ大学などで発展した。トマス・リードはアバディーン大学の教授であり、ヘンリー・ヒュームの『道徳と自然宗教の原理』を紹介し、認識論において我々は印象や観念を媒介せずには外的世界を直観できるという立場をとった。つまり外的世界に対する認識を問題としており、当時の心理学的テーマに該当する。「ソウルからマインドへ」(1997)⁽⁸⁾を執筆したエドワード・リードは、トマス・リードをカントと同じように「魂の科学は不可能である」と論じた人物としている。スコットランドは長くイングランドと対立関係にあったが、産業革命時代には経済が発展し、大学も発展しスコットランド啓蒙思想を展開させた。

大まかに述べれば西周のころの心理学は、ヴントの新心理学ができる以前の、哲学の世界で心の科学が論述されていた時代の書物の紹介であるが、その中でもメンタル・フィロソフィーという原著のタイトルが示すように、スコットランド啓蒙主義時代の議論を中心とするものであったと考えられる。別論文で述べたように、西周に訳を依頼した人は西村茂樹と考えられるが、幕末明治の日本では輸入の段階で誰かが本の選出をしているのだがそれを明らかにすることは難しい。西村もしくは西は当時、この「メンタル・フィロソフィー」を訳することが日本にとって必要だと考えたのだと推察される。

3. 元良勇次郎がアメリカに行く前に読んだ本について

元良勇次郎は、安政5年(1859)兵庫県三田市で生まれ(杉田家)、明治14年(1881)に元良家の養子となった。明治維新後、洋学に強い興味を抱き、神戸のデイヴィス宅に住み込み英語と洋学を学んだ。

明治8年(1875)同志社英学校に入学し、そこで学んだ。同志社英学校は江戸時代末期にアメリカに密入国し、カルヴァン主義のキリスト教の「日本伝導通信員」となった新島襄が創設した学校であり、元良はその初期の卒業生である。同志社英学校は明治8年11月29日設立である。元良は初代の学生8人のうちの一人であった。元良はそこで行われた性心理学の授業と、J.D. デイヴィスが蔵書していた「精神生理学の原理」^(註1)に影響を受けた。

明治16年(1883)、渡米しボストン大学の哲学科に入学するが、教授と対立し、依願退学する。その後、ジョンズ・ホプキンス大学の生物学教室に転向する。実験心理学を学び、ジョンズ・ホプキンス大学にてPh.Dを取得する。彼を指導したのはスタンレー・ホールであった。また、博士論文は「Exchange」であった。元良の帰国後の著作については、翻刻出版全集が大山正らを中心にクレス出版から刊行されており、筆者も翻刻に参加した(元良の人生については『元良勇次郎著作集第1巻』を参考にした⁽⁹⁾)。

「精神生理学の原理」には、脳と心の関係、注意について、感情、記憶についてなど、現在の日本で知られる心理学の図書ではW.ジェームズの『心理学』に近いことが記載されていた。元良が渡米前にこの本を読んで影響を受けていたのであれば、心理学をアメリカで学んだことも了解できる。

元良が留学前に読んだ本であるが、第1章の初めの部分と試訳を掲載する。その本は「Principles of mental physiology ; with their applications to the training and discipline of the mind, and the study of its morbid conditions.」著者はWilliam Benjamin Carpenter, 発行年1876、出版社はLondon, H.S. King & Co. 保存はカリフォルニア大学図書館、言語は英語である。

「Summary

1. The Conscious Life of every individual Man essentially consists in an action and reaction between his Mind and all that is outside it, -the Ego and the Non-Ego. But this action and re-action cannot take place, in his present stage of existence, without the intervention of a Material Instrument; whose function it is to bridge over the hiatus between

the individual Consciousness and the external World, and thus to bring them into mutual communication.

And it is the object of this Treatise to take up and extend the inquiry into the action of Body upon Mind, as well as of Mind upon Body, on the basis of our existing knowledge;

so as to elucidate, as far as may be at present possible, the working of that Physiological Mechanism which takes a most important share in our Psychical operations; and thus to distinguish what may be called the automatic activity of the Mind, from that which is under volitional direction and control.]

試訳「総ての個々人の意識的生活は、彼の心と外に出るもの（エゴと非エゴ）との間の行動と反応の中に、本質的に存在している。しかしこの行動と反応は取り換えられない、彼の存在において、個々人の意識と外の世界と間の橋をかける機能をもつ物質的道具の介入なしに、そしてそれは彼らに相互のコミュニケーションを運ぶ。この論文には、心の上の体の動き、体の上の心と同様に、我々の存在する知識の基礎の上で、行われる疑問を拡大し取り上げるという目的がある。以下述べることを説明するために、現時点で可能な限り、肉体の器官の働きが、心理的働きにおいてどの程度重要な役目を果たしているのか。

そして心の自動的活動と呼ばれているものと、意志的な指示とコントロールの下にあるものとを区別する、という目的がある。」

本の最初の部分であるが、人間の体と心の関係、意識と無意識の関係を取り扱った本であることがわかる。本の前半には脳の図と説明が載せられており、生物学者でもあったカーペンターがその知識を生かして、生物としての脳、人間の体と心に挑んだ著作であることがわかる。

元良はアメリカ留学後一時的に生物学教室にいたことがある。これもカーペンターの著作に注目すれば疑問は起きず、むしろ早いうちから元良にとっては脳の機能や心と体の関連について心理学的に理解する気持ちがあったことがわかる。これらの留学前のメンタル・フィロソフィーへの興味が帰国後の活動とどのように関連するかは今後の検討課題となる。

4. ジョセフ・ヘブンとヴァント以前の心理学について

太田 (1997) ⁽¹¹⁾によれば、ジョセフ・ヘブンは、1816年アメリカ生まれ、1851年から1858年まで、アマースト大学の精神哲学、道徳哲学の教授であった。彼はスコットランド哲学の系譜をついでおり、ハミルトンの

影響を受けていた。スコットランド哲学は前述した、人間の常識 (Common sense) を重視する学派である。ハミルトンは Sir William Hamilton (1788-1856) であり、代表著書は *Philosophy of the Unconditioned*。(無制約者の哲学、1829)、*Discussions on Philosophy and Literature, Education and University Reform*。(哲学と文学、教育と大学改革について、1852) である。スコットランド常識学派の代表的な人物である。1857年のテキストについては、授業をする際に適切なテキストがなかったため、自分で執筆したらしいとのことである。Gerald F. Vaughn⁽¹²⁾によってマサチューセッツ歴史論集に寄せられた論文によれば、ヘブンの「*Mental Philosophy*」はアメリカの19世紀後半のこの領域での良い教科書に分類されるという。Jay Wharton Fay はウィリアム・ジェームズ以前のアメリカの心理学ではヘブンの本は素晴らしくクリアに心理学説を述べているが、明らかに William Hamilton の影響を受けていると述べている。マサチューセッツの教師向けの雑誌には、「高校やカレッジの心理学の教科書として最適である」という書評が載っていた。アメリカの著名な社会学者、社会心理学者であるソースティン・ヴェブレン (Thorstein Veblen) は、ヘブンの著書からスコットランド常識哲学を学び、それに強い影響を受けた、と Vaughn は述べている。彼はカールトン・カレッジ・アカデミーでヘブンの教科書を用いた授業を受けた。

ヴェブレンの博士論文は「因果応報説の倫理学的基礎」であり、彼はシカゴ大学やスタンフォード大学で教えた。日本では『有閑階級の理論』が翻訳されている。このヴェブレンのような重要な学者が強い影響を受けたのがヘブンの著作であると Vaughn は述べている。

社会学者、経済学者としてのヴェブレンについてであるが、日本では、2017年に新井田智幸が東京大学にヴェブレンの人間本性論の博士論文を提出しており⁽¹³⁾、いまだに検討される理論である。ヴェブレンの人間本性論は、製作本能 (instinct of workmanship) という人が働くための心理的背景を述べたものであり、ヘブンが影響を与えているとすれば、のちの経済学に大きな影響を与えたと考えられる。ヘブンとその理論のアメリカでの展開はいまだ不明な点が多く、今後も検討する余地がある。

西周が訳した『心理学』の著者であるヘブンについて以上のようなことがわかった。これまではアメリカで教科書として使われていたらしい、という点しか指摘されていなかったが、著者ヘブンはスコットランド常識哲学の強い影響下にあり、特にハミルトンの影響を受けていたこと、のちにアメリカの社会学者ヴェブレンに影響を与えたことが明らかになった。この西周訳

の『心理学』がその後の日本の社会にどのような影響を与えたのかいまだ不明な点が多く、調査と検討が望まれる。

5. まとめ

今回はインターネット上で閲覧できる英語の原著を参考にし、西周と元良勇次郎が読んだ本について検討した。彼らが読んでいた心理学書はもちろん、ここで紹介したものだけではなく。また、今回紹介した図書だけが彼らに影響を与えたとは言えない。しかし日本初の『心理学』翻訳者西周と、日本初の職業的心理学者である元良勇次郎がどのような心理学原著を読んでいたのか検討することにより、教育心理学の日本におけるルーツに少しでも近づくことができるように思われる。今回は触れることができなかったが、実験心理学の手法が日本に紹介され、子どもの実際の調査等がいかに教育心理学上に現れてきたか、さらに検討を進めたい。

註 1

「精神生理学の原理」を執筆した、ウィリアム・ベンジャミン・カーペンターは英国の医師で、様々な研究をしたが、晩年はアルコール依存の研究と、無意識の研究を行った。ロンドン大学で 1856 年から 23 年間教鞭をとった。生物学、博物学、また心理学を研究した学者であった。研究時期はダーウィンと同時期である。留学前に元良がカーペンターを読んでいたことは大山らも指摘している。

引用文献

- (1) 西周訳 『心理学』明治 8-9 年 文部省
- (2) Joseph Haven, *Mental Philosophy*, 1857, Sheldon and Company
- (3) 太田恵子、「西周訳「心理学」刊行」（『通史日本の心理学』佐藤達哉、溝口元編）、1997、北大路書房
- (4) 伊藤邦武、物語哲学の歴史、2012、中公新書
- (5) 城戸幡太郎、心理学問題史、1968、岩波書店
- (6) George Sidney Brett, *A History of Psychology*, 1912, London : G. Allen & company, ltd.
- (7) George Sidney Brett, *A History of Psychology*, Vol. III *Modern Psychology*, 1921, London : G. Allen & company, ltd.
- (8) エドワード・S・リード著 村田純一他訳 「魂から心へ」、2000、青土社
- (9) 大山正監修、大泉博編集主幹、『元良勇次郎著作集 1』、2013、クレス出版

(10) William Benjamin Carpenter, *Principles of mental physiology ; with their applications to the training and discipline of the mind, and the study of its morbid conditions.*, 1876, London, H.S. King & Co.

(11) 太田恵子、「コラム・ジョセフ・ヘブン」（『通史日本の心理学』佐藤達哉、溝口元編）、1997、北大路書房

(12) Gerald F. Vaughn, *Amherst Professor Joseph Haven and His Influence on America's Great Social Critic, Thorstein Veblen*, *Historical Journal of Massachusetts* Vol.34, No.1. p43-55.

(13) 新井田智幸、「ソースティン・ヴェブレンの制度理論と 人間本性論」、2017、東京大学経済学研究科博士論文

参考文献

- 梅本 堯夫、大山正著 「心理学史への招待」、1994、サイエンス社
- 大山正著 「心理学史：現代心理学の生い立ち」、2010、サイエンス社
- 西川泰夫、高砂美樹著 「心理学史」、2010、放送大学教材
- 南 博著 「原典による心理学の歩み」、1974、講談社
- 篠原 久著 「アダム・スミスと常識哲学—スコットランド啓蒙思想の研究」、1986、有斐閣
- 青木裕子他著 「常識によって新たな世界は切り開けるか、コモン・センスの哲学と思想史」、2020、晃洋書房